

歴史探訪 Part II - ③⑩

江戸川木材工業株式会社

顧問 清水 太郎

6月1日、「東海道ネットワークの会」第60回例会がありました。テーマ「駿河三宿逍遙 頼朝 白隠 天皇の古跡を辿る」であります。三宿とは三島 沼津 原であります。

私は昭和、平成、令和の年代に駿河の国に関わった経験があり、今回の例会は大変懐かしい気持ちで参加しました。前回述べた、学卒後勤務したゼネコン最後の現場が東名高速道路建設の愛鷹作業所でありました。東海道本線原駅から北へ5キロ行った新幹線のもっと北側にありました。先日東名高速道路が開通して50年が経過しましたが、その経済効果は30兆円と発表されておりました。当時の日本は経済的に乏しく、世界銀行から融資を受けて建設をしました。その条件の一つが国際入札でありました。図面の表記は英語で示されておりました。入札から参加した私は、辞書を引きながら見積もりをしたことを懐かしく思い出しました。1964年東京五輪を契機に日本経済は高度成長を続けました。

平成5年(1993)急に思い立って東海道中を始めました。53歳の働き盛りでありましたので、土日の休日に日本橋から歩き始め、初日は大森の鈴が森まで、二日目神奈川宿、三日目戸塚宿、四日目藤沢宿、五日目大磯宿、六日目小田原宿、七日目元箱根、八日目三島宿、九日目原宿まで歩き、その先はあまり土地勘がないので友人の萱原画伯を誘い、駅前にある木賃宿風の旅館に泊まり翌日からやじきた道中となりました。宿の女将はどこかで会ったような感じがし、彼女も私に会ったことがあるようなことを仰っておりました。若しそうだとすれば、ゼネコン勤務で1年間滞在したときのことでしょうが、お互いそれ以上詮索することはしませんでした。

翌日画伯と旧東海道を西へ歩き、田子の浦を経て道に迷い、富士山を頼りに歩いていると、遠くで踏切を電車が通過するとき鳴る警笛の音が聞こえ、音を頼りに歩いて行きますと単線鉄道の無人駅がありました。須津〈すど〉という駅で、画伯はその駅がすっかりお気に入りです。ベンチに座ってスケッチを始めました。あとで調べますと、吉原から出ている岳南鉄道という電車でしたが、画伯がスケッチの間、私はその電車に乗って探索に出かけました。途中で初老の夫人に出会い、その人は居眠りして自分の降りる駅を通過し私と一緒に終点まで行って折り返し、須津で降りると入れ違いに画伯が乗ってきました。結局終点の吉原で降りて食事をし、後は富士川の流れて疲れた足を漬けて富士川駅から電車で帰りました。結局東海道中は平安遷都1200年で賑わう時代祭りを見て無事終了しました。

懇意にしていた下町タイムスの今泉社長に相談し、画伯のスケッチと私の文章で『ぶらり東海道旅日記』を出版し、今泉社長の紹介で読売新聞が取材に来てその記事が掲載されました。記事をご覧になった東海道ネットワークの会の重鎮 飛澤さんから電話を頂き、そのご縁で入会させていただきました。

一方、道中歩きは、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道と続き、1999年12月には五街道踏破を達成しました。

2020年は2度目の東京五輪開催が決定し、平成31年天皇は退位され、5月から新しい年号が始まりました。6月1日は令和の代初の例会となりました。発足当初500名以上いた会員は26名に減り、それでも

半数に当たる13名が参加し三島駅からスタートしました。以下、行程により探訪します。

三嶋大社と呼ばれ、平安期から伊豆の国一宮として信仰を集めてまいりました。知名度を高めたのは、源頼朝で、源氏再興を祈願し、此の神社に百日間参拝。挙兵に成功。頼朝は新領を寄進。以後多くの将軍、執権の参拝がたびたび行われてきたが、南北朝時代は足利尊氏が戦勝祈願をしました。戦国時代は今川氏や北条氏との関係が強かった。豊臣秀吉の小田原攻めの折には豊臣軍により破壊されたが、慶長年間に徳川家康によって再建された。本殿、幣殿、拜殿はいずれも国重文です。



三嶋大社

出典：三嶋大社

<http://www.mishimataisha.or.jp/>

興国寺城(国史跡、続百名城)は沼津市根古谷にあった平山城で北条早雲(伊勢新九郎)の旗上げの城として知られる。新九郎は今川家の家督争い時に氏親を助けた功で、東駿府、富士郡下十二郷を与えられ興国城城主となり、続いて小田原城を攻め取り大大名となった。この城はその後駿府今川氏の支城となり、今川義元が桶狭間で敗れると甲斐の武田の傘下となった。その後、武田氏の滅亡により徳川駿府城の支城となった。家康が江戸に転じると、秀吉配下の中村一氏が治めた。関ヶ原の戦い以降は再び徳川家の支配となり、戦国大名のせめぎあいの場であった。城は愛鷹山の尾根の上に建ち前面の浮島沼を要害とし、後部には壮大な掘割を配していた。ゼネコン勤務時、近くにかくも由緒ある名城跡があるとは知らなかった。私のいた工事地域も富士火山灰を含んだローム層で、雨が1日降ると、湿地となって、ブルドーザーも入れず難渋したことを懐かしく思い出しました。

原宿公民館で葦山反射炉弁当を頂いた後、松蔭寺 弘安2年の開創で鎌倉円覚寺の末寺であったが、江戸時代初期に興津清見寺の援助で臨済宗妙心寺派の末寺として再興された。宝永の富士大噴火で大破したが、白隠禅師によって蘇った。白隠はこの地で生まれ、幼少から聡明で、出家以後は江戸中期の仏教界に新風を吹き込み、500年に1度の名僧と仰がれた。臨済宗の中興の祖と仰がれ、衰退した妙心寺を再興する一方、禅画を確立し、釈迦、観音、達磨を好んで描いた。世に『駿河の国に過ぎたるもの二つあり富士のお山と原の白隠』と呼ばれた。寺の山門は白隠の考案による百八枚の石瓦葺きが特徴、六角形の開山堂、原宿本陣の玄関も移築されている。裏の墓域に白隠の墓がある。かつては岡山藩主池田侯から寄進された備前焼の鉢が松ノ木に鎮座していたが枯れ死したため本堂横に保存されている。帯笑園 原宿の素封家植松家が江戸時代後期から昭和初期まで代々伝えた庭園。珍しい植物のコレクションを植生。当時には珍しい温室を備えるなどし、その時期に最もよい状態で植物を観賞できる。帯笑園は海保青陵が寛政3年名づけた。東海道に面した立地条件から、江戸時代には街道を往来する大名から一般庶民まで、明治以降も政治家や軍人が数多くこの園を訪れ賞賛している。文政9年、東海道を江戸に下ったドイツ人医師シーボルトは、「今まで日本に来て見たものの中で最も美しく、また鑑賞植物に最も豊かなるものなり」と江戸参府日記に書いている。

沼津御用邸記念公園 大正天皇の静養の地として建てられ、昭和天皇も幼少の頃ここで過ごしたことを懐かしんでおられた。昭和20年の沼津空襲で母屋は焼失したが、東西の別邸はそのまま残され保存されている。

沼津千本浜公園 沼津の狩野川河口から富士の田子の浦に続く奥駿河湾の一角にある。その松原からは波打ち際の白波と愛鷹山越えに富士山を望む素晴らしい景観(日本百景)、(日本の白砂青松百選)にも選ばれている。『東関紀行』や『東海道名所記』にも描かれている。近くは若山牧水がこの地をことのほか気に入り、夫婦の菩提寺も近くの乗運寺に定めた。松林には沼津中学に学んだ井上靖の文学碑、牧水の歌碑が松林特有の芳香に包まれている。



千本浜公園

出典：沼津市観光情報

https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kankou/asobu/hiking_walking/shionone/index.htm